

## 一、首相外交

今日の世界は、既にトップ外交の時代にはいったといえる。それは交通通信が急速に発達し、一方核時代を迎えて、外交が時を移さず処理しなければならぬ問題が次々に出てきたことによるといえよう。情報浸透の速度と密度からいえば、今の世界は中世の一都市よりも狭くなったという人もある程である。

西欧による世界支配を支えた単調な論理とリズムは、既に遠い過去のものとなった。今日の世界はその構成自体が複雑多様のものなり、かつて栄えたイデオロギーの群像もその権威と生彩を失った。そこに生起する問題も新しさと厳しさを加えた。かかる状況下にあつて各国民国家はひたすら、みずからの生存の確保と必要の充足にそれぞれ必死の個性的な努力を傾けておる。

これまでおのずと分業的に処理されてきた内政と外政との境界線は、かくして容赦なく取去られようとしておる。世界の一角に起こつた事件は、待ったなしでそれぞれの国の首都によつて反

応が示されねばならず、その処理もまた、内政との関連と迅速さが重視されてきた。外交案件の処理が、自然、首都中心になり、従つてまた首相中心にならざるを得なくなつた所以であらう。かくて、大使館は在来のプロトコルの他は、専ら首都外交　首相外交の下準備をする機関になつたといえるし、外務省自体が既に首相外交の準備省的性格のものとなつてきた。

ところが本来首相にとつては、一つの政治があるだけであつて、内政と外交が別々にあるのではない。だから内政上の失敗を外交で補うとか、内政で成功したが外交では失敗した等という捉え方は本来、論理の矛盾といふべきである。問題はあくまでも首相その人の全人格的な政治の姿勢と実践にある。

首相は、いうまでもなく、最高の政治指導者であり、一国を代表する顔である。その一挙手一投足には千金の重味があり、その発言は最終的であり、その責任は誰にも転嫁することが許されない。また首相は全閣僚の任免権を一身に掌握し、その名に値する國務大臣は首相一人であるといえよう。首相の立場と責任は、かくて、実体的にも制度的にも愈々その重さを加えてきた。

しかし、この孤独な首相にとつて、閣僚の任免権こそは唯一の救いとなつている。首相には閣僚を信頼し、これに任す自由と権利が与えられておるからである。もとより閣僚の功罪は、これを無条件に自分のものとしなければならぬ。そこに首相と閣僚の不動の信任関係が生まれる。

首相がその心構えで各閣僚に臨む限り、各閣僚はその信任に十分応えるところがなければならぬ。

外務大臣と外務省もまた首相の信任の下、首相外交の補佐機関として周到且つ活発に機能しなければならぬ。永田町と霞が関の間には寸分の空隙があつてはならない。またいうところの外交の一元化は、その補佐機能の権威と信用、能率と充実を保證する限りにおいてのみ是認されるべきものである。

秋の到来と共に、佐藤首相は台湾を手始めに外遊に旅立たれようとしておる。私はその意気を壯とし、その労を多とし、その成功を日本のために祈るものである。もとより首相外交はその外遊に始まり、その帰国を以て終わるものではない。佐藤首相は、淡々たる平常心を以て、片々たる人気や俗評に捉われることなく、日本の名譽のため全力を尽すべきである。首相の仕事はその言葉と態度を以て日本の友情と善意、誠意と眞実を相手に理解せしめるだけで十分である。外交は誠意を以て貫くべき公人の任務であり、それ以外のものではないからである。